保育の現場から

四歳児の三月に思う

高橋陽子

四歳児の三月は、「もうすぐ一番大きい組になる」というわくわくした気分でいっぱいです。五歳児の顔つきや生活から、「今度は自分たち」ということが伝わってきたようです。また本園では二月の末ころから、一人が一つ、五歳児へのプレゼント作りをし、卒業式後に年長保育室で渡します。よく一緒に遊んだお兄さんや、あこがれのお姉さんに渡したい、という思いで保育室を訪ねますが、卒業式を無事に終えたばかりの五歳児の雰囲気の中ではなかなか思う人には渡せず、誰に渡した、渡せなかったで、ちょっとしたドラマがあります。

「よく一緒に遊んだ」その一つに、「リレー」がありました。四歳児だけでリレーをやろうとしていると「入ってやるか」と少々年長ぶったような言葉と態度で近づいてきて、さりげなく人数の少ない方に入ったり、順番を教えたりしてくれました。優しくって、足の速いお兄さんは、大人気でした。

「よく遊んでいたのを見た」その一つに、「どろけ

い」があります。一緒にやる時もありましたが、五歳児の足の速さと共に、強い仲間意識の中にはなかなか入れず、遊ぶ様子を見ていました。そして二学期の半ばころから、牢屋を設けない、いわゆる「鬼ごっこ」を自分たちで始めだしたのでした。

四歳児三学期半ばころ

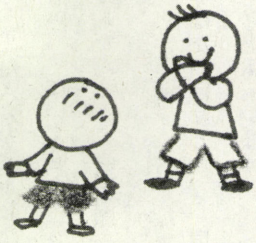
園庭から、「やーめたやめた」と怒鳴るような声が聞こえました。一人の声ではありません。私は「またか……」という気持ちで園庭を見ます。子どもたちも、先生が来て、何か言うだろうということは想像しているようです。こちらと目が合いました。「だって、またA君がズルしたんだもん」と言います。Aも黙ってはいません。「B君だって、C君だって、ズルしただろう」。怒り顔の子どもたちのやりとりの中で、「いつも、おれ一人だけ鬼にさせられる」と激しくはないけれども、心穏やかではないことを口にする子どももいます。

二学期半ばころ

四歳児のこのクラスは、もともと走ったりたたかいごっこをしたり、と園庭で体を動かして遊ぶことが好きな子どもたちが多くいました。二学期の半ばころから、鬼ごっこやリレーを自分たちでも始めるようになったのです。そのころは、「どろけい」のように牢屋に入れるということはなかったので、「鬼ごっこ」と呼んでいました。

リレーは、走る場所が決まっていて(山を一周するリレーです)、バトンをつないでいく、という比較的ルールがわかりやすい遊びです。ところが鬼ごっこは、一人ひとりの子どもの中でルールがいろいろ都合よく変わります。仲良し同士で、自分たちにいいようにルールをかえてしまうことだってできます。

鬼に捕まりそうになると、「バリアー場」に逃げ込みます。その中に、鬼は入れません。十秒経ったら出る、というルールを決めて始めているにもかかわ



らず「休憩中」とか「いま、やめているから」などと言って、何十秒でもそこに居続けます。鬼はたまったもんではありません。また、腕を胸の前で交差させて「バリアー」と言って止まります。そうすると、鬼に捕まらずにすみます。鬼はやっと追いつきそうになるたびに「バリアー」と言われてしまえば、怒りだしたくもなります。それはAに限ったことではないのです。ところが、Aだけが何だか目の敵にされたような言い方をされてしまいます。

A君のこと

一学期、新入児のAは、「こうしたい」と思ったら、何が何でも要求を通そうと主張しました。保育者に対しても「どうしてやってくれないんだ。うわーん。お願いだよお。やってよお」と泣きまねまで加わって、要求してきます。「ちょっと待っていてね」と言っても「やだあ、なんで、いますぐじゃないんだよお」と大きな声で言います。また「明日も使えるように、幼稚園に置いていってね」と提案しても「明日、持ってくるから」と言って、その日作ったものを持ち帰ります。そして翌日忘れて「作って」と要求する。その繰り返しでした。

ほかの子どもたちとも同じようなやりとりはありましたが、繰り返しの中で、保育者の状況を見て待つ、明日も使いそうだから置いていく、ということを自然に受け入れていくようになりました。そんな中で、いつまでも要求を強く出すAを、何だか自分とは違うようだ、とほかの子どもたちは感じていったのだと思います。

それともう一つ。二学期になってAは、アイデアマンのEの作る物が、何でも欲しくなりました。「先生、E君と同じのを作って」と言いに来ます。保育者と一緒に教えてもらいに行くと「なんでいつもまね

ばかりするんだよ」とEはふてくされています。そして周りにいる友達に、「またAは、おれのまねをしてる」とこそこそと言うことがありました。アイデアがあり、器用で、ことばも明瞭で、走るのが速いなど、いろいろな意味で一目置かれているEが言うのですから、周りの子どもたちもAをますます疎ましく感じるようになっていきました。

そして、三月

鬼ごっこに保育者が加わり、大勢で遊ぶ積み重ねの中で「バリアー」のルールを守る方がおもしろいことや、鬼同士、鬼ではない同士が作戦を考える楽しさを味わい、そういうやりとりが子どもたちだけでも見られるようになりました。

ただし、楽しげな遊びの向こう側には、自分たちに都合よくしたり、誰かをのけ者にしたりする姿もまだまだ見られます。それが子どもの世界なのでしょうか。

四歳児クラスに新入・進級し、一年間過ごしてくる中で、友達のあれやこれやがわかってきます。気の合う友達、合わない友達、保育者の対応の仕方まで、子どもたちは自分の感覚でとらえていて、それをいろいろな方法で表出します。Aのように、三学期になって、友達の自分への態度に気づくようになった子どももいます。まだまだ、どう見られているか、気にしない子どももいます。

同じ時間、同じ空間で過ごしてきても、年長の遊びを同じように見てまねてやってみても、それぞれのやり方も楽しみ方もみんな違うようです。

四歳児の三月「もうすぐ一番大きい組になる」ことの期待感の中に、「お互いを認め合って」とか「ルールを決めて」という、この先何年間もかけて作り上げていく大切なことを、どう伝えていきましょうか。一人ひとりの子どもたちや遊びから、いろいろなことを考えさせられるこの時期です。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）